

## 『「教えて考えさせる授業」を創る アドバンス編

『主体的・対話的で深い学び』のための授業設計』市川伸一 図書文化 2020

### 「授業構想シート」作成について P. 37～

「教えて考えさせる授業」には、  
「学力の低い生徒もついていける」「学力の高い生徒にもあきさせない」という大きなねらいがある。  
これを実現するために、1ペーパーの「授業構想シート」を用いる。

### 「習得目標」「困難度査定と指導上の工夫」「予習＋4段階の構成」を構想する

- 困難度査定を的確に行ったうえで  
「何を教え、何を考えさせるのか」「教え方や理解深化課題をどうするか」  
→ 「教えて考える授業」を構想する。

#### 「習得目標」

「本時の目標」「めざす子ども像」・・・具体的に、明確に構想する。

#### 「困難度査定と指導上の工夫」を必ず入れる

- 「困難度査定」・・・実際に、その授業をやろうとしたとき、生徒にとっていったいどこがどれくらい難しいだろうかと推し測ってみること。つまずきそうな点だけでなく、逆に、「ここはおそらく簡単にわかってくれるだろう」ということも含む。
- 本時の目標を立てるときには、次の点に考慮する
  - ・目標と生徒の実態のギャップがどれくらいあるか
  - ・どう工夫すればそれが埋められるか  
→ これが、生徒の目線に立った授業にするための第一歩である。

**予習**・・・本時の学びにどんな課題を持って授業に臨ませたいかを書く。  
※教科書を読んでくる程度でもよい。

#### 4段階の授業構成

**教師の説明**・・・確実に教えたい内容・確実に理解させたい内容を書く。  
※前時までの確認ではないことに留意する。

**理解確認**・・・教えた内容がわかったかどうか確認するための学習内容及び方法を書く。  
ほぼ全員が達成できることを目標にする内容を設定する。  
※ペアで説明し合う活動など。

**理解深化**・・・学習した内容を使って深めたり、発展させたりして、教えたことを定着させるための学習内容及び方法を書く。  
グループ活動を通して最終的に80%が説明できる程度の内容を設定する。  
※グループで説明し合う活動など。

**自己評価**・・・振り返りで生徒たちに記入させたい文章のイメージ  
※何がわかって（できて）、何が分からなかったか（できなかった）のかを記述させる。

## 「教えて考えさせる授業」構築の3レベル

段階レベル	方針レベル	教材・教示・課題レベル
教える		
(予習)	授業の概略と疑問点を明らかに	<ul style="list-style-type: none"> <li>通読してわからないところに付箋を貼る</li> <li>まとめをつくる／簡単な例題を解く</li> </ul>
教師からの説明	教材・教具・説明の工夫	<ul style="list-style-type: none"> <li>教科書の活用（音読／図表の説明）</li> <li>具体例やアニメーションによる提示</li> <li>モデルによる提示</li> <li>ポイント、コツなどの押さえ</li> </ul>
	対話的な説明	<ul style="list-style-type: none"> <li>代表生徒との対話</li> <li>答えだけでなく、その理由を確認</li> <li>挙手による賛成者・反対者の確認</li> </ul>
考えさせる		
理解確認	疑問点の明確化	教科書やノートに付箋を貼っておく
	生徒自身の説明	ペアやグループでお互いに説明
	教えあい活動	わかったという生徒による教示
理解深化	誤りそうな問題	<ul style="list-style-type: none"> <li>経験上、生徒の誤解が多い問題</li> <li>間違い発見課題</li> </ul>
	応用・発展的な問題	<ul style="list-style-type: none"> <li>より一般的な法則への拡張</li> <li>生徒による問題づくり</li> <li>個々の知識・技能を活用した課題</li> </ul>
	試行錯誤による技能の獲得	<ul style="list-style-type: none"> <li>実技教科でのコツの体得</li> <li>グループでの相互評価やアドバイス</li> </ul>
自己評価	理科状態の表現	「わかったこと」「わからないこと」